

甲田遺跡・喜志南遺跡 発掘調査報告書

2008. 9

富田林市教育委員会

はじめに

富田林市は、市域の中心を石川が流れ、緑豊かな丘陵と美しい田園風景が調和した自然環境に恵まれたまちです。そのなかでも、中央部の石川とその支流によって形成された平野部は、遺跡も多く存在することから古くから人々の営みが行なわれていたことがわかっています。しかし、このような事実の蓄積は多くの開発のなかから生まれてきたものであり、発掘調査による新たな発見と引き換えに遺跡の破壊がなされてきたことを看過することはできません。

本書は、平成19年度に宅地造成に伴い実施しました、甲田遺跡、喜志南遺跡の埋蔵文化財調査の成果をまとめたものです。いずれの調査も、これまでの調査で知られていなかった成果が得られ、地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

これらを次の世代に引き継ぐために、発掘調査で得られた見地を有効に活用されることを、望んでやみません。

最後になりましたが、調査および本書の刊行にご協力いただきました地元住民の皆様や関係各位に厚くお礼を申し上げます。

平成20年9月

富田林市教育委員会
教育長 堂山博也

例　　言

- 1 本書は、宅地造成に伴い、平成19年度に実施した甲田遺跡および喜志南遺跡の発掘調査概要である。
- 2 現地調査は、富田林市教育委員会生涯学習部文化財課が開発事業者の依頼を受けて実施した。
- 3 本書の執筆は、甲田遺跡を同課文化財振興係の藤田徹也が、喜志南遺跡を青木昭和が行った。ただし、喜志南遺跡の第3章「遺物」に関しては藤田が執筆した。
- 4 調査には以下の参加を得た。(敬称略)
　上田伸子、瀬戸直子、前野美智子
- 5 本書で使用する標高は東京湾標準潮位(T.P.)で表示している。また、方位は特に断りがない限り座標北を表示し、座標値は世界測地系を基本としている。
- 6 現地調査における土色や出土遺物の色調については、『新版 標準土色帖』(小山正忠、竹原秀雄編)を使用した。
- 7 出土遺物および調査にあたり作成した図面、写真等は、富田林市教育委員会文化財課で保管している。多くの方々の活用を望むものである。
- 8 調査にあたり、下記の方々から指導、助言ならびに協力を得た。記して感謝いたします。(順不同、敬称略)
　佐藤圭聖、佐々木理、松原建設株式会社、株式会社ファミティホーム

目 次

甲田遺跡

第1章 調査に至る経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第3章 調査の成果	2
第4章 まとめ	5

喜志南遺跡

第1章 調査に至る経過	6
第2章 遺跡の位置と環境	6
第3章 調査の成果	6
第4章 まとめ	10

挿 図

図1 KD2007-1 調査区位置図	1
図2 KD2007-1 遺跡周辺図	1
図3 KD2007-1 遺構平面図	2
図4 KD2007-1 北西壁面断面図	2
図5 KD2007-1 調査区中央付近平面図	3
図6 KD2007-1 調査区東側平面図	3
図7 KD2007-1 出土遺物	4
図8 KSS2007-1 調査区位置図	6
図9 KSS2007-1 遺構平面図	7
図10 KSS2007-1 建物1平面図	8
図11 KSS2007-1 建物2平面図	8
図12 KSS2007-1 出土遺物	9
写真1 KD2007-1 遺跡遠景（南から）	1
写真2 KD2007-1 調査区中央（直上から）	3
写真3 KD2007-1 調査区東側（直上から）	3
写真4 KD2007-1 調査区上空から金剛山系を遠望（北西上空から）	5
写真5 KSS2007-1 建物1（北から）	8
写真6 KSS2007-1 建物2（南から）	8
写真7 KSS2007-1 調査区全景（西から）	10

図 版

上段 KD2007-1	出土遺物 土師器・瓦器
中段 KD2007-1	出土遺物 不明瓦質製品
下段 KSS2007-1	出土遺物 上師器・瓦器・須恵器

甲田遺跡

第1章 調査に至る経過

富田林市甲田一丁目において宅地造成の計画が民間会社より提出された。その計画地は、甲田遺跡内に該当したため、市教育委員会は、民間会社の立会いのもと、事前調査を行った。その際、深度約30～40cmで地山面を検出し、遺構、遺物も確認した。その後、民間会社との協議によって、遺跡が破壊される可能性のある私設道路敷き部分、約280m²の範囲について市教育委員会が発掘調査を行うことになった。

現地調査は、富田林市教育委員会文化財課文化財振興係係長青木昭和と同嘱託藤田徹が平成19年7月10日から31日まで実施し、その後、富田林市立埋蔵文化財センターにおいて上田、瀬戸、前野の協力のもと、藤田が内業整理をおこない、本書の刊行をもってすべての業務を終了した。



図1 調査区位置図

第2章 遺跡の位置と環境

甲田遺跡は、富田林市の中心を流れる石川左岸の低位および中位段丘上に位置しており、この地形は、南の河内長野市域から北の羽曳野市域の方向へ緩やかに標高を下げながら続いている。石川左岸の低位段丘と中位段丘の段丘座は高いところで10mにもおよぶが、甲田遺跡周辺では、5m弱ほどであり、周辺地形と比較し低位と中位段丘の高低差が少ない所である。遺跡内の中位段丘縁部には東高野街道が遺跡を貫く形で通っており、この地形上に位置する遺跡は、市域の中で最も分布密度が濃く、当該遺跡周辺の新家遺跡、甲田南遺跡、谷川遺跡は、距離を隔てずに近接している。

調査区北側約1.5km先に位置する畑ヶ田南遺跡の調査では、東高野街道と一部重複する形で道

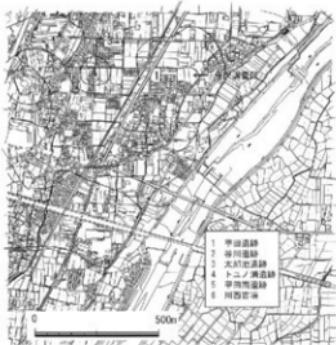


図2 遺跡周辺図



写真1 遺跡遠景（南から）



図4 北西壁面断面図

路状遺構が検出されており、現状の東高野街道は、施設当初の位置からそれほど変わらなかった可能性が高い。

既往の調査では、古代から中世にかけての遺構・遺物が認められるが、いずれの調査地も狭小であるため、遺跡の全容をつかめるまでには至っていない。

第3章 調査の成果

基本層序

①層は、耕土で層厚は約10cmである。②層は整地土及び末土で層厚約15cmである。③層も整地上で約15～20cmである。④層は、10YR4/3 黄褐色（シルト～極細粒砂）に10YR4/1 褐灰色（シルト～極細粒砂）が混入する混合土で、最も厚い北西側壁面で層厚約50cmを測る。④層は、調査区ほぼ中央付近から西側に向かって深度を下げながら、地山直上に堆積している。調査区の東側では、整地上直下に地山面が認められ、後世の耕作地化により削平を受けているものと考えられる。なお、今次調査区における遺構は、すべて地山面で確認している。

遺構

今次調査区で検出された遺構の中で、特に南東側の各遺構は、後世の耕作化によって削平されている可能性が高く、深度10cmに満たないものが多く見られる。こうした状況から、調査以前に削平、消滅した遺構が数多くあったものと考えられ、今次調査区では、約50の遺構を検出したが、建物の復元など、遺構の性格を明らかにできるものは少ない。

検出した遺構として、土坑とピットが挙げられる。土坑は、調査区南東側において、不定形の土坑を2箇所検出した。

SK 1 の北側は調査区外へと続く。検出できた範囲は、長軸約 1.5m、短軸 0.8m を測り、深さは、調査区壁面と接する場所で約 10cm 程度であった。埋土は、10YR3/2 黒褐色（シルト～極細粒砂）と 2.5Y4/2 暗灰黄色（シルト～極細粒砂）の混合土であった。出土遺物として瓦質の大型製品が出土したが、その器種、時期ともに不明である。

SK 2 は、SK 1 の南側で検出した。長軸約 3m、短軸約 1m を測り、深さは、約 7cm、埋土は、2.5Y4/2 暗灰黄色（シルト～極細粒砂）であった。出土遺物としては土師器皿が挙げられる。

さて、先述したように、今次調査区において明確に掘立柱建物を復元できる遺構の検出はなかった。しかしながら、ピットの規模、深度の様相から、建物や柵列などの軸を推定できるような、ピットの並びが確認できる。

列 1 は、SK 2 を切る形で、ほぼ南北に 3 つのピットが並ぶ。柱間は、約 1.5m で、各ピットの深さは、約 15cm ～ 20cm である。SP13 より土師質羽釜や、瓦器楕片、土師器皿片などが出土しているが、図化可能なものはなかった。

また、列 1 と同様、ほぼ南北を主軸とするものに列 2・列 3・列 4 がみられる。それぞれの列を繋ぐピットの検出がなかったため、これが、掘立柱建物を構成するもののかは不明である。また、L 字状に並び掘立柱建物である可能性が高い SB 1 も、同様の軸である。なお、SP39 と SP46 は切り合っているが、後述するように、出土する遺物にそれほどの時間差はみられない。SB 2 については、ピットの間隔がやや広く、同一の掘立柱建物を構成する柱穴であると判断するにはやや躊躇するが、規模や埋土に共通点がみられ、また、それぞれの深度が浅く、掘立柱建物を構成する他の柱穴が消滅してしまった可能性も考えられる。

この軸をなすピットからの出土遺物は、いずれも碎片のため、明確な時期の特定は困難であるが、SP39 から出土した和泉型瓦器楕の様相から 12 ～ 13 世紀代であると



図 5 調査区中央付近平面図



写真 2 調査区中央

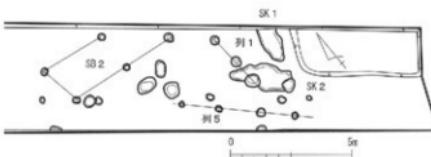


図 6 調査区東側平面図



写真 3 調査区東側

考えられる。

以上のような、軸をほぼ真北にとる柱列のほかに、軸が真北より約45°西に傾く列5も想定される。これらは、調査区西側で検出した自然の落ち込みのラインと類似しており、自然地形状で採用された軸である可能性も考えられるが、こうした見解は、周辺の調査や、明瞭に掘立柱建物や樹列などの列群を捉えられた際に、再度考えていく必要があるであろう。

遺物

1・2は、SK 2から出土した土師器の皿である。1は、口径8cm、器高1.5cmを測る。底部からやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。2も、SK 2からの出土で、口径器高ともに同様の数値を測る。口縁端部は、1が口縁端部に向かって、丸みを帯びながら上方に立ち上がるのに対し、2は、やや外反気味に立ち上がるのが特徴である。いずれの資料も黄褐色を呈している。

3は、SP39出土の和泉型瓦器碗である。図化した資料は、体部と底部の接合関係はないが、同時期の資料のものと考えられる。口径は、碎片からの復元数値で約14cm、器高は推定約5cmである。口径が、約14cmとやや小さいものの、碎片からの復元数値であること、器高が少なくとも5cm近くなること、高台径が広いこと、高台の形骸化がはじまり台形状を呈するものの、下方外側に踏ん張る形状などを踏まえると、和泉型瓦器碗編年II期末～III期初頭に該当するものと考えられる。内面見込み部に施された暗文は、正格子状暗文である。

4も和泉型瓦器碗である。SP46から出土した。口径については、3と同様、碎片からの復元数値のため、積極的な評価はできない。3の資料よりも厚みがあり、内面のヘラミガキも比較的密に施されている。和泉型瓦器碗編年II期段階の所産であると考えられる。

5は、地山面の精査中に出土した。大和型瓦器碗である。これも碎片資料である。口縁内面に沈線が入る。本市域における大和型瓦器碗の出土は、錦織遺跡、中野北遺跡について3例目であり、この資料も含め、いずれも大和型瓦器碗編年III期段階のものである。

6は、SK 1から出土した。口径22.4cm、器高10cmを測る瓦質の製品であるが、詳細は不明である。内面底部中央付近にやや凹みがある。全体的に粗雑な印象を受ける。

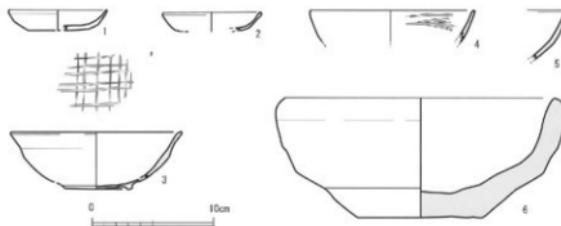


図5 出土遺物

第4章 まとめ

これまでみてきたように、今次調査区は、後世の水田開発等に伴う削平を受けており、遺構の残存状況は悪く、遺構の性格が明確に示せるような状況ではなかった。

しかしながら、これまでの甲田遺跡の調査において確認できていなかった中世段階の建物軸が確認できたことの意義は大きい。

1998年度の調査¹では、ほぼ真北に沿った溝を検出している。その報告に拠れば、その溝の埋没時期は12世紀代であると考えられ、今次調査区で検出した真北に沿う列群の所属時期と一致する。また、今次調査区に隣接する1984年、1985年度の調査区でも同時期頃の鉢溝などが検出されている。²

もう一方の軸は、調査区北西側の落ち込みのラインと概ね一致している。この落ち込みは、遺構ではなく自然地形の落ち込みであると捉えられ、この北西約45°に傾く軸は、自然地形にあわせた軸であったと考えられる。

今次調査区の北側には、西側から東側へ流れる水路が現存している。この水路は、今次調査区の落ち込みラインの北側延長付近で屈曲する。それまで、ほぼ真東にむかって流れていた水路が、今次調査区の落ち込みラインとほぼ一致する形で屈曲することは、水路施設段階において、今次調査区で確認した落ち込みなどの自然地形によって制限された可能性がある。

この水路は、今次調査区の北東側で、市域を南北に横断する水路（通称「深溝」）にぶつかる。この「深溝」の成立が、段丘崖の高低差が著しい石川左岸段丘上の土地開発に大きな影響を及ぼしたこととは言うまでもないが、今次調査区のような、「深溝」より標高の高い西側に位置する土地は、羽曳野丘陵縁部から東側へ続く水路の施設によって開発が可能になる。したがって、当該地域の土地開発を考える上で、こうした水路の開発時期や様相も重要な視点となってくる。

今次調査区においては、出土遺物が少なく各遺構の所属時期を明確に示すことは困難であったが、今後、こうした建物軸の特定や周辺水路の関連性を踏まえることによって、未だ不明な点が多い「深溝」の成立や、「深溝」に繋がる東西溝の成立時期について言及することができるであろう。

註

¹ 田中正利『甲田遺跡II』富田林市遺跡調査会

1998年

² 本報告



写真2 調査区遠景（西側から）

喜志南遺跡

第1章 調査に至る経過

喜志町一丁目地内において宅地造成を計画した業者から発掘届出がなされたことを受け、富田林市教育委員会では、事前調査を実施した。計画地の一部で遺構を検出したことから、開発者との間で遺構の保存について協議を行なった結果、宅地部は盛土により遺構の保護を図り、計画地中央を南北に通る位置指定道路部分については発掘調査を実施したうえで記録保存を行うこととした。発掘調査対象面積は約380 m²である。現地調査は、文化財課 青木昭和が担当し、平成20年1月8日から2月4日まで実施した。その後、遺物等の整理作業を行ない、本書刊行をもってすべての業務を終了した。

第2章 遺跡の位置と環境

喜志南遺跡は、石川左岸の低位から中位河岸段丘上に位置し、南北約250 m、東西約150 mの楕円形状の広がりをもつ。1980年代に存在が知られるようになったが、ほとんどが水田など営農地域であったこともあり、これまで調査はほとんど行われておらず、1997年に行われた調査が唯一のものである。これは、今次調査地のすぐ西側で富田林市遺跡調査会によって実施されたものであり、縄文時代晚期から中世までの幅広い時代の遺構や遺物が認められた。¹

しかし、以前から爱好者によって石器などが表面採集されていたようである。富田林市史には、喜志遺跡および東阪田遺跡で表面採集された石器が紹介されているが、そのうちのA地点が、その位置から喜志南遺跡に相当すると考えられる。²

遺跡周辺に目を転じると、南西に桜井遺跡と近接し、西から北西方向には喜志遺跡や喜志西遺跡が立地する。

喜志遺跡は、標高50 mほどの中位河岸段丘上に位置する、弥生時代中期を中心とする遺跡であり、特にサヌカイト製の石器や石核、剥片が多量に出土するなど、この時期の石器製作に深く関わる遺跡として理解されている。

喜志西遺跡は、1982年に喜志駅前整備に伴う試掘調査で発見された遺跡であり、その後も住宅建設など数次にわたる調査が行われている。方形周溝墓や壺形棺墓が確認されており、喜志遺跡の墓域である可能性も指摘されている。³

桜井遺跡も中位河岸段丘上に位置する遺跡で、1984年の大阪府教育委員会による調査では中世の掘立柱建物や井戸が、1998年の富田林市遺跡調査会の調査では7世紀から8世紀代の遺構が確認されている。



図8 調査区位置図

第3章 調査の成果

調査区は南北に長いL字状を呈しており、調査地の元の地形は、段々に造成された水田である。

南辺東部と拡張部は、中心部から見て一段下がっていて、その高低差は約45cmある。調査区の南辺東端で溝を検出したが、低位面での遺構密度は総じて低い。おそらく、造成時に削平を受けたが、削平が比較的少なかった部分だけが、奇跡的に遺構が残ったものと考えられる。

基本層序

基本的な層序は、地表面から順に、①層耕土、②層10YR4/6褐色土（整地土・床土）、③層10YR4/4褐色粘質土（遺物包含層）、地山の順である。遺構は地山面で検出した。なお、調査区南半分では③層にかわって、④層10YR4/3にぶい黄褐色の砂礫土層が見らるが、これには全く遺物を包含しない。

遺構

今回検出した遺構としては、掘立柱建物2棟のほか、溝、土壙、井戸、ピットがあり、その総数は400を超える。以下、主要な遺構について報告する。

井戸1（SE1）

調査区北端で、ほぼ半分が西壁にかかってた状態で検出した。直徑約1mである。地山面から0.7m下まで掘削したが、非常に狭くそれ以上掘ることができなかつた。

溝1（SD1）

調査区北端で検出した東西方向の溝である。南側の肩部のみ検出したため、溝幅は不明であるが、深さは20cmと浅い。すぐ北側が段丘崖であることから、崖際の整地層である可能性もあるが、断面形状からここでは溝として取り扱う。

出土遺物には和泉型III期前半、大和型III期前半の瓦器が見られた。

溝2（SD2）

調査区南東への延伸部端で検出した。幅2m、深さは0.5mを測る。

ピット

ピットは調査区内に広く分布するが、北部と南部の2か所にやや集中して見られる。ピットの

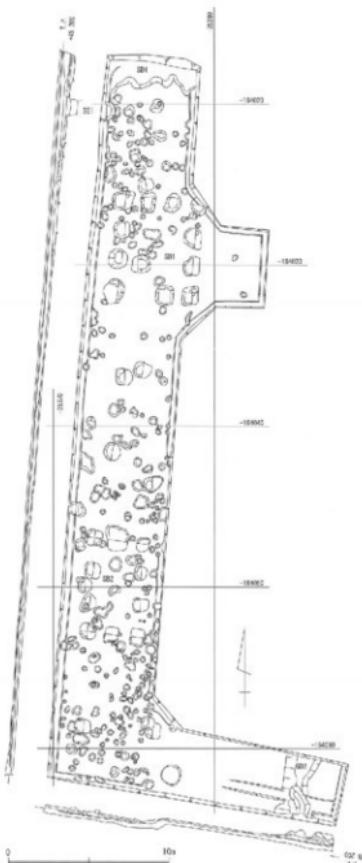


図9 遺構平面図



図10 建物1平面図

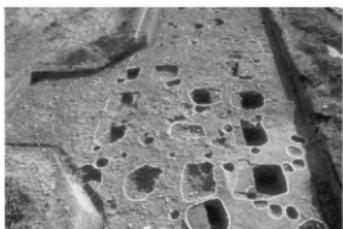


写真5 建物1（北から）

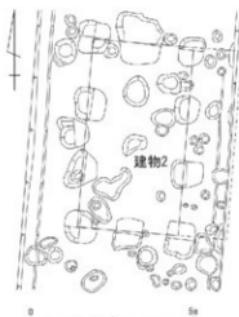


図11 建物2平面図



写真6 建物2（南から）

多くは非常に浅く、地山に含まれる礫の合間を縫ったように不整形なものも多く見られる。ピットが並ぶ部分がいくつかあり、一部は建物や柵列を構成していたものと考えられるが、明確にそれらを復元することはできなかった。

これらから出土した遺物は土師器が多いが、國化できるものはほとんどなく、また時期の特定も困難であった。

建物1 (SB 1)

調査区北部で検出した掘立柱建物跡である。南北3間、東西3間であり、建物の中軸は、座標北から東に約6度振れている。柱の掘形は隅丸の方形を呈し、その一辺は約1mから1.5mである。いくつかは掘立柱痕を確認することができ、柱間は南北約1.8m、東西は約1.5mと想定できる。なお、検出面を念入りに精査したにもかかわらず、南辺の一部で柱穴を検出できなかった。他の掘形の深さから見ても削平されたとは考えにくく、何らかの意図を持って、柱を設けなかったと考えられる。

出土した土師器甕などの遺物から9世紀代のものと考えられる。また、一部黒色土器片も見られることから、10世紀代に廃絶したと推定できる。

建物2 (SB 2)

調査区中央からやや南よりで検出した掘立柱建物跡である。南北3間、東西2間であるが、さらに東側、調査区壁面沿いに等間隔で並ぶピット列の肩部のみが見えていることから、総柱建物であるか、東方に庇を持つ建物である可能性も考えられる。

建物の中軸は、建物1と全く同じ方向を示し、2つの建物はほぼ同じ軸上で並ぶが、遺物量が少なく時期を推察することはできなかった。

掘形は隅丸の方形で、一辺は約1mを測る。掘立柱痕を確認することができなかったが、およそ、柱間は南北約1.9m、東西は約1.6mと推定される。

遺物

1・2は、和泉型瓦器碗である。いずれも溝1からの出土である。1は、口径15.2cm 器高、5cmを測る。口縁部・高台ともにやや歪みがある。外縁のヘラミガキは見られず、内面も口縁部付近は比較的密にヘラミガキが施されているが、体

部はまばらである。見込み部の暗文は斜格子状暗文である。2は、口径 14.2cm 器高 5cm を測る。1と同様に口縁部・口台ともに歪みがあり、高台は、中心線からややはざれている。内・外面とともに磨耗が著しくヘラミガキは確認できないが、内面見込み部には平行線状の暗文が施されている。いずれの資料も法量やヘラミガキの状況を加味すると尾上実氏の和泉型瓦器編年でいうⅢ期前半の所産であると考えられ、12世紀後半頃に位置付けられる。

3・4は、大和型瓦器碗である。3は、口径 14.5cm 器高 5.7cm である。資料は、表土と遺構面精査時に取り上げた遺物の接合資料であり、このことからも、地山より上面の削平度合が窺える。外面上部と内面体部は密にヘラミガキが施されており、内面見込み部には連結輪状暗文が施されている。4は、溝1からの出土である。口径 15cm を測り、内面のヘラミガキは密に施されている。いずれも、大和型瓦器碗Ⅲ期前半頃に位置付けられる。

5は、土師器杯である。口径 17.2cm を計り、器高は 2cm 前後になると思われる。口縁部はやや外反気味に立ち上がる。外面のヘラケズリ、内面のヘラミガキなどは見られない。

6は、土師器の小型甌である。口径 11cm、残存器高 5.7cm を測る。体部の振りはやや弱く、頸部から口縁部にかけてやや外反する。5と6は、9世紀中頃の所産であると考えられる。

7は、土師器甌である。口径 21.2cm を測る。体部は、やや張り気味であり、頸部から口縁部にかけての字状に立ち上がる。頸部の状況などから、6よりもやや新しく、10世紀頃の所産であると考えられる。

8は、須恵器甌である。口径 8cm を測り、残存器高は 6cm を測る。頸部から口縁部にむかって

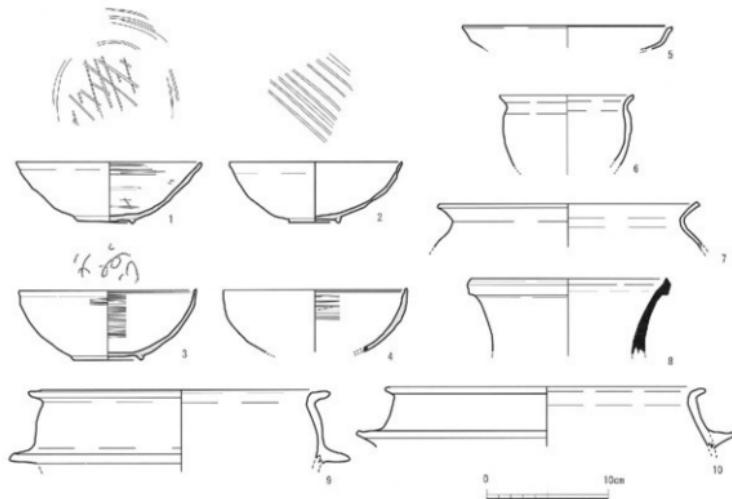


図 12 出土遺物

やや外反気味に立ち上がり、口縁端部を上方に屈曲させている。口縁部はわずかに肥厚しており、口縁肥厚部の外面は、緩やかな凸線が巡る。頸部は回転ナデで調整されている。以上の特徴から、6世紀頃の所産であると考えられる。

9・10は、土師質の羽釜である。9は、口径25cmを測り、鈍より上部だけが残存している。鈍より丸みを帯びて内傾し、口縁部で外側に向かって折れ曲がる。12～13世紀頃の所産と考えられる。10は、口径25cmを測る。鈍より内傾して立ち上がるが、9ほど丸みを帯びない。口縁部は外側上方に折れ曲がる。12～13世紀頃の所産であると考えられる。

今次調査区の出土遺物は碎片が多く、実測可能なものが少ないため、遺跡の性格や位置付けをおこなうには困難であるが、大和型瓦器碗の出土など貴重な成果もみられた。大和型瓦器碗は、これまで錦織遺跡、甲田遺跡、中野北遺跡について4例目の出土であり、2点以上の出土は、当遺跡が初見である。

本市域においては、和泉型瓦器碗I・II期が少なく、III期から増加傾向にあり、和泉型瓦器碗が西日本に広く展開する時期と同一傾向にある。和泉型瓦器碗の生産に際し、大和型瓦器碗の影響が少なからず及んでいることは、既に指摘されているところではあるが、藤井寺市など南河内北部地域がIII期段階に入り大和型瓦器碗の出土が少なくなる中、本市域においてIII期の大和型瓦器碗が認められることは、本市域における和泉型瓦器碗の受容が北部地域とは異なった状況が想定されるのである。³

また、実測はできなかったが、川西編年V期の埴輪も出土している。凶化し得た須恵器壺の時期とも一致しており、当遺跡周辺の古墳の存在を想起させる一助となる。

第4章　まとめ

調査地のすぐ西側では、1997年に富田林市遺跡調査会によって発掘調査が行われたが、ここでは、縄文時代晩期に属する遺物が出土しており、報告書では調査区の東側に縄文時代の集落の広がりを示唆するものであると指摘している。⁴しかし、今次調査では縄文時代に属する遺構、遺物は確認できなかった。

今回の調査では、古代に属する遺構が確認できたことに大きな意義がある。検出した2棟の掘立柱建物は主軸を1にして並んでおり、9世紀から10世紀にかけて、整然と並ぶ建物群の存在を示すとさせる。また調査区の北側と東側が段丘崖であることから、集落の北東端であることがうかがえる。

また、1点のみではあるが埴輪片が出土した。現在、近辺には古墳は見られないが、さほど離れていない場所に古墳が立地していたことを示唆する資料である。なお、周辺では、中野北遺跡の北西端で埋没古墳が発見されている⁵ほか、喜志遺跡や喜志西遺跡、中野遺跡など、中位河岸段丘上に位置するいくつかの遺跡で埴輪が出土しており、古墳時代中期から後期に属する古墳が、かつて石川左岸の河岸段丘上に点在していたと考えられている。⁶

一方、当調査では、中世段階の遺



写真7　調査区全景

物も数多く確認することができた。前述したように、それらは12世紀後半頃を中心とするものであるが、その中には若干量ではあるが大和型の瓦器碗も含まれている。

南河内でも北部（藤井寺市など）では、Ⅲ期段階以降は大和型瓦器碗の出土が非常に減少するのに対して、富田林市域では少ないながらも大和型瓦器碗が見られることや、東部にあたる太子町の植田遺跡や峰ヶ尾遺跡で、大和型瓦器碗の比率が高いことはすでに指摘されている。⁷ 大和型瓦器碗Ⅲ期が確認された喜志南遺跡、中野北遺跡は、その太子町域と石川をはさんですぐ対岸に位置している。

今次調査では、南河内地域における和泉型瓦器碗の受容状況を考える上での新たな資料を得ることができたと言えよう。

註

¹ 北野耕平、樋口古文、忍薰「喜志遺跡」『富田林市史 第一巻』1985年、P167～171

² 平方扶左子、田中正利『喜志西遺跡』1997年、富田林市遺跡調査会

³ 藤田徹也「南河内における中世前半期の土器概観」『南河内における中世城館の調査』2008年、大阪府教育委員会、P14～22

⁴ 田中正利『喜志南遺跡』1998年、富田林市遺跡調査会

⁵ 古墳時代後期と推定できる小石室を持つ方墳であった。西口陽一『中野北遺跡』2005年、大阪府教育委員会

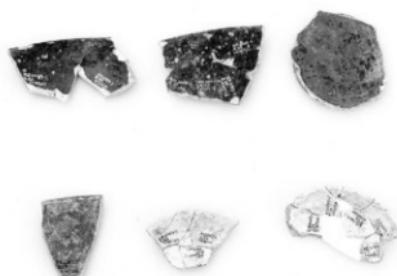
⁶ 栗田薰「石川中流域、段丘上の埋没古墳」『平成6年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』1995年、P32～40

⁷ 前掲註3

報告書抄録

ふりがな	こうだいせき・きしみなみいせき はつくつちょうさほうこくしょ					
書名	甲山遺跡・喜志南遺跡 発掘調査報告書					
著者名						
卷次						
シリーズ名	富田林市文化財調査報告					
シリーズ番号	41					
編著者名	藤田徹也 青木昭和					
編集機関	富田林市教育委員会					
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 Tel:0721-25-1000(代)					
発行年月日	2008(平成20)年8月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²
市町村	遺跡番号					調査原因
こうだいせき 甲山遺跡	富田林市 こうだい ちょうめ 甲山一丁目	43	34° 29' 44"	135° 35' 44"	2007.7.10 ~ 2007.7.31	289.56
きしみなみいせき 喜志南遺跡	とんだばやしし 富田林市 きしらう ちょうめ 喜志町一丁目	27214	6	34° 31' 14"	135° 36' 53"	379.65
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
甲山遺跡	集落跡	弥生～中世	掘立柱建物、樹列、土塁、ピット等	土師器、須恵器、瓦器		
喜志南遺跡	集落跡	縄文～中世	掘立柱建物、溝、井戸跡、ピット等	土師器、須恵器、瓦器、瓦、埴輪、サヌカイト等		

図
版



甲田遺跡 出土遺物
土師器・瓦器



不明瓦質製品



喜志南遺跡 出土遺物
土師器・瓦器・須恵器

甲田遺跡・喜志南遺跡発掘調査報告

発行年月日 2008年9月30日

編集・発行 壱田林市教育委員会

印 刷 横本印刷株式会社

2008.300

